

特別活動部会 研究の構想（案）

令和6年度～

I 研究主題

学級活動を通して身に付けるべき資質・能力を育成するための指導はどうあればよいか。

II 主題設定の趣旨

特別活動は、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせながら「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する」ことを通して、資質・能力を育むことを目指す教育活動である。

特別活動で育成を目指す資質・能力とは以下の三つである。

- (1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。
- (2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。
- (3) 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。

「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の三つの視点が、上記の資質・能力を育成する学習過程において重要な意味をもつ。また、生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現は、各活動・学校行事の学習過程において、授業や指導の工夫改善を行うことで質の高い学びを実現することである。それは、特別活動の各活動・学校行事を通して、資質・能力を身に付け、中学校卒業後も能動的に学び続けることにつながる。

学級活動は、学校生活において最も基礎的な集団である学級を基盤とした活動である。日々の生活を共にする中で、生徒は、一人一人の意見や意思は多様であることを知り、時には葛藤や対立を経験する。こうした中で、自ら規律ある生活を送るために、様々な課題を見だし、課題の解決に向けて話し合い、合意形成を図って決まったことに対して協力して実践したり、意思決定したことについて粘り強く実践したりする。

そこで、これまでの研究の成果を踏まえて、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせ、学級活動における「問題の発見・確認」「解決方法等の話し合い」「解決方法の決定」「決めたことの実践」「振り返り」といった一連の学習過程の中で、資質・能力の育成を図りながら主題の解明に取り組んでいきたい。

III 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

- (1) 学級における集団活動や自律的な生活を送ることの意義を理解し、話し合いの進め方、よりよい合意形成や意思決定の仕方、チームワークの重要性や役割分担の意義等について理解できるようにする。
- (2) 学級や自己の生活、人間関係をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。
- (3) 学級における集団活動を通して身に付けたことを生かして、人間関係をよりよく形成し、他者と協働して集団や自己の課題を解決するとともに、将来の生き方を描き、その実現に向けて、日常生活の向上を図ろうとする態度を養う。

2 研究内容

- (1) 指導計画を工夫する。
 - ・小学校の6年間を踏まえ、3年間の学校生活を見通した系統的、発展的な指導計画の充実
 - ・カリキュラム・マネジメントの観点に立った、各教科や「特別の教科 道徳」等の指導との関連
 - ・生徒が活動を記録し蓄積するキャリア・パスポート等の活用によるキャリア教育の充実
- (2) 指導内容や指導方法を工夫する。
 - ・生徒の実態に応じた課題設定や学習形態の工夫
 - ・ICT機器や思考ツール等の効果的な活用方法の蓄積
 - ・話し合い活動を通して合意形成や意思決定の仕方の指導
 - ・話し合いを通して決めたことの実践やその振り返りの活動の充実
 - ・集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンスと一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリングを充実させた指導の推進
- (3) 評価を工夫する。
 - ・生徒の自己有用感や自己肯定感を高め、よさや可能性を伸ばす観点に立った、継続的で多面的・総合的な評価
 - ・一連の学習過程を意識した、活動の振り返りと改善への工夫

特別活動部会 令和7年度研究計画（案）

I 研究主題

学級活動を通して身に付けるべき資質・能力を育成するための指導はどうあればよいか。
一話合い活動を通して合意形成や意思決定し、粘り強く実践できる生徒の育成を目指して―

II 主題について

1 昨年度の実践から

昨年度は、学級活動を通して身に付けるべき資質・能力を育成するために学級活動において、話合い活動を通して合意形成や意思決定し、決めたことを実践しようとする生徒の育成を目指し、研究を進めてきた。その結果、次のような成果や課題が得られた。

- ・学級活動(1)において、事前アンケートの結果を分析し、学級の実態に基づいた議題を選定することによって、学級の課題を自分事として捉えるとともに、グループや学級全体の話合いに自分の考えをもって臨むことができた。
- ・学級活動(2) (3)において、授業の導入時でのICT等を活用した視覚的な支援等によって、題材について多面的・多角的に考えるための教師の支援に工夫がみられた。
- ・学級活動(1)において、合意形成に基づき、集団の形成者として、自分の個性を生かして何ができるかを主体的に考えて意思をもって取り組むためには、学級の課題を自分事として捉え、自分なりの意思をもって合意形成に臨む話合いの仕方についての教師の働きかけが大切である。
- ・学級活動(2) (3)において、意思決定しただけで終わることなく、決めたことについて粘り強く実践したり、一連の活動を振り返って成果や課題を確認したり、更なる課題の解決に取り組もうとする意欲を高める活動を、教師が意図的・継続的に行っていく必要がある。

2 今年度の主題について

学級活動では、生徒が学級や学校での生活上の問題を見付け、その解決のために話し合い、合意形成したことに協働して実践したり、個々の生徒が当面する諸課題等について自己を深く見つめ、意思決定をして実践したりする。生徒は、自主的、実践的に取り組む活動を通して、現在及び将来の自己と集団との関わりを理解し、健全な生活や社会づくりの実践力を高めていく。

学級活動(1)では、生徒が問題を見だし、「共同の問題（議題）」を選定する。解決方法等について話し合い、折り合いをつけて、集団として「合意形成」を図り、役割分担し協力して実践する。

学級活動(2) (3)では、教師が生徒の実態を基に「共通の問題（題材）」を設定する。課題解決に向けた具体的な方法等について話し合い、自分としての解決方法等を一人一人が「意思決定」して実践する。さらに、実践を定期的に振り返り、結果を分析し次の課題に生かすことで課題解決に向けた活動の充実と意識化を図る。

そこで、授業のねらいや目指す生徒の姿を踏まえながら、話合い活動を通して生徒が自分事として課題を捉え、粘り強く実践できるようにするための教師の指導や関わりはどうかについて研究を行う。

3 主題解明に当たって

- (1) 学級活動において育成を目指す資質・能力は、「問題の発見・確認」「解決方法等の話し合い」「解決方法の決定」「決めたことの実践」「振り返り」といった一連の学習過程の中で育まれる。

学級活動(1)では、課題に対して、一人一人が自分なりの意見や意思をもった上で、合意形成に向けた話合いに臨むようにし、合意形成に基づき実践するに当たって、自分自身に何ができるか、何を行うべきか、ということを主体的に考えて、意思をもつことが大切である。

学級活動(2) (3)では、話合いを通して、相手の意見を聞いて、自分の考えを広げたり、課題について多面的・多角的に考えたりして自分に合った解決方法を自分で「意思決定」することが重要である。さらに、生徒が意思決定しただけで終わることなく、決めたことの実践の成果や課題を定期的に確認するなどして、粘り強く実践を行うための手立てが必要である。

- (2) 合意形成を図る内容の学級活動(1)と意思決定を目指す内容の学級活動(2) (3)は、いずれも学級活動における話合いの場面が中核であり、学級活動のねらいに応じて、学習過程を工夫する必要がある。具体的には、アンケート集計や結果の表示、考えの共有の際にICT等を活用したり、考えを整理するためにKJ法やフィッシュボーン、ピラミッドチャート等の思考ツールを活用したりする。

Ⅲ 研究内容とその視点

1 指導計画の工夫

- (1) 学校の創意工夫を生かすとともに、学校や学級の実態や生徒の発達段階等を踏まえ、生徒による自主的、実践的な活動を助長する。
- (2) 内容相互、各教科、「特別の教科 道徳」及び総合的な学習の時間等の指導との関連を図る。
- (3) 小学校からの接続に配慮し、中学校入学当初を含め3年間の学校生活を見通した系統的、発展的なガイダンスを指導計画に位置付ける。
- (4) 学級活動が、生徒の学校生活における学習や生活の基盤である学級を単位として展開されることから、年間指導計画の作成に当たっては、学級経営、学年経営との関連を図る。

2 指導内容と指導方法の工夫

学級活動の内容の特質を踏まえた学習過程とする。

- (1) 学級や学校における生活づくりへの参画
 - ・小学校6年間の経験で身に付けてきた話合いのスキルやルールを把握し、それらを発展させるようにする。
 - ・主体的な話合い活動にするために、事前指導の時間を確保し、学校生活と直結した、生徒にとって切実感のある議題等を決定する。学級や学年・学校全体として解決方法等について話し合い、多様な意見を生かして合意形成を図る。
 - ・班長会議や係会議、諸調査等を活用して学校生活を振り返る機会を設け、生活をよりよくするための諸課題を生徒自身が見付けられるようにする。
 - ・教師の働きかけの方法やタイミング、話合いの在り方を工夫し、合意形成に向かうための論点が焦点化できるようにする。
 - ・実践を定期的に振り返り、結果を分析し次の課題解決に生かすよう指導する。
- (2) 日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全
 - ・生徒が学校や学級での生活に見通しをもって積極的に取り組むことができるよう、計画的、組織的に適切な情報を提供する。
 - ・よりよい生活を築くために、自己の問題に向き合って意思決定するための話合い活動を適切に設定する。
 - ・中学校入学当初においては、小学校と連携して生徒の実態を把握した上で、個々の生徒が学校生活に適應できるように配慮し、生徒が希望や目標をもって生活できるよう工夫する。
 - ・実践を定期的に振り返り、結果を分析し次の課題解決に生かすよう指導する。
- (3) 一人一人のキャリア形成と自己実現
 - ・生涯を通じて主体的に進路を選択できる力を養うために、小学校での学びを踏まえて、中学校入学から卒業までの3年間を見通した指導計画を作成し、継続した学習を進める。
 - ・自分の考えをまとめて意思決定したり、実践後に振り返ったりする活動を設定し、学ぶことや働くことの意義や将来の生き方について考えさせる。自分の学びを「キャリア・パスポート」等に蓄積するなど、自己のキャリア形成に生かすことができるようにする。
 - ・実践を定期的に振り返り、結果を分析し次の課題解決に生かすよう指導する。

3 評価の工夫

- (1) 生徒一人一人のよさや可能性を生徒の学習過程から積極的に認め、特別活動で目指す資質・能力がどのように育まれているかについて、各個人の活動状況を見取り、評価する。
- (2) 活動の結果だけでなく、過程における生徒の努力や意欲等を積極的に認めたり、生徒のよさを多面的・総合的に評価したりする。
- (3) 生徒一人一人が、自らの学習状況を見通したり、振り返ったりすることによる自己評価や相互評価を適切に活用する。
- (4) 評価を通して教師が指導の改善を図り、より効果的な指導を行うことができるようにする。
- (5) 国立教育政策研究所発行の「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（中学校 特別活動）を活用する。

Ⅳ 研究方法

- 1 生徒や学校、地域の実態に合わせた議題を設定し、研究主題に沿った授業実践と研究授業を行う。
- 2 各郡市、地区で持ち寄った実践事例に基づいて共同研究を進め、研究主題の解明を図る。
- 3 各郡市、地区の研究成果を集約し、次年度以降の研究に生かす。

